

Project
Operation
Sight for
All

POSA 事業報告

No. 11

●平成 19 年度



ALL THAT IS NOT SHARED IS LOST



POSA 目 次



理事長の言葉

「プレショップ ECCE の予感」

POSA 理事長 医療法人輝秀会理事長 倉富 彰秀 P1

理事より

「久米さんを偲んで」

POSA 副理事長、菊池眼科院長 井上 望 P3

ライオンズクラブより

「ひとりひとりにできること」

神埼ライオンズクラブ前会長 東 キヨ子 P5

アイキャンプ参加者より

「POSA アイキャンプに参加して」 長崎大学大学院循環病態制御学講師 山近 史郎 P6

「POSA - For the people of Bangladesh」

BNSB Eye Hospital Eye Surgeon Dr. Md.Mizanur Rahman ... P8

「アイキャンプを通じて得たもの」 エンゼル協会 バングラデシュ コナバリ地区現地責任者 アジズル・バリ ... P9

「A Noble Venture」

Lions Club International Past Council Chairman Md. Nurul Islam Mollah ... P10

「再び目に輝きを取り戻して」 NPO 法人 国際エンゼル協会理事 浅野 博之 P12

「アイキャンプの思い出」 菊池眼科 看護師 佐伯 陽子 P13

「2 回目のアイキャンプ」 熊本県立保健学院 羽生 友美 P15

「アイキャンプと子供たちの笑顔」 佐賀大学医学部 2 年 戸次 宣史 P16

「POSA アイキャンプに参加して」 長崎県立島原高校 3 年 伊崎 祐之 P17

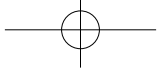
「アイ・キャンプを体験して」 くらとみ眼科医院スタッフ 楠元 國公 P18

平成 18 年度事業報告及び平成 19 年度事業計画

平成 18 年度・平成 19 年度事業報告書 P19

御支援を頂いた方の一覧表 P20

POSA 理事・監事名簿・POSA 名誉会員・POSA 規約（一部抜粋）・入会のお願い P21



ALL THAT IS NOT SHARED IS LOST



プレチョップ ECCE の予感 POSA 理事長 医療法人輝秀会理事長 倉富 彰秀



『神の左手』と言うそうである。

なぜ神の左手と言うのかは知らないし、知りたくも思わない。

この番組で先日、東京の三井記念病院の赤星先生のプレチョップPEAが紹介されていた。

もともとプレチョップ法というのは、白内障手術初心者の方に考え出された方法であり、現在の多くの熟練の白内障術者はプレチョップ法を行っていない。

1日40眼、年間約6000眼以上の手術をする為には1.8mm極小角膜切開及びプレチョップPEAという術式が最も適切であるという内容だった。確かに多症例をこなすには、この極小角膜切開&プレチョップは適切な術式だと感じた。

(私は強角膜2.5mm切開にて手術を行っている。) また、私の場合は他の多くの日本の眼科医と同様にフェイコチョップテクニックにて白内障手術をしている為Grade I からⅢまでの核ならばprechopの必要性を感じない。ただGradeⅣ以上の硬い核の場合はプレチョップテクニックは有用である。

番組の中では、過熱白内障の硬くて大きな核がプレチョップ後、フェイコにて容易に吸引除去されて

いた。

『これは楽でいいなあ〜。』

そんな事を考えながらぼんやりテレビを見ていて『これだ!』……と思った。

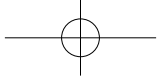
『これだ!』というのは、そう、表題の如くプレチョップECCE、この事である。昔からプレチョップECCEという考えはあったが、このchopper&sustainerを用いてのプレチョップECCEは、アイキャンプにこそ有用な術式なのではないだろうか。

話は飛んで13年前、私がこの佐賀の神埼町で開業の年、世界のフェイコの流れを作った永原先生のフェイコチョップテクニックがASCRSでグランプリを受賞した。その翌年アメリカのボストンだったか、マイアミだったかで行われたASCRSに参加した。

この時、イスラエルのドクター (だったと思う) が、ビデオ発表していたMini-Nucテクニック (ミニヌークテクニック、又にはアクセントがある) がグランプリを獲得した。このビデオのナレーションがなまりの強い英語であった為、この『ミニヌークテクニック』という言葉が妙に頭にこびり付いている。

このMini-Nucテクニックというのは、核片を創口に持ってきてシンスキーフックのような細い器





ALL THAT IS NOT SHARED IS LOST

具を創口に差し入れて分割しながら約6mmの切開創から核を分割して摘出するというテクニックである。もちろん皮質の吸引もシムコ針を使用する為、一切のフェイコマシーンは不要である。

この時私は、このテクニックは受賞はしているが切開創付近の内皮の損傷がかなりあるのではないかと思った記憶がある。また『今時マシーンを使わない手技というものもなんだな〜。』と感じていた。その発表は内皮のダメージはほとんど無いと言うものであったが、ちょっと激しい手技で『怪しいなあ〜。』とも感じていた。

さて、現地アイキャンプでは9割以上の症例がGrade IV以上の硬くて大きい核の白内障である。この様な硬くて大きな核に対して、プレチョップテクニックは特に有用だと思う。もちろんMini-Nucテクニックよりもはるかに安全な手技である。プレチョップテクニックで核を小さく分割して通常の圧出法で摘出。又は、還流付きのリンヒで摘出、症例によってはサンドウィッチ法にて摘出。これを4分割であれば4回。8分割であれば8回繰り返せばいいわけである。4～6mm切開でのECCEが可能となる。原則無縫合だが状況に応じて縫合を行えば良い。

提唱

現在の所、AOCAの飽浦先生が提唱され現地では一般的に普及しているcrow vectis還流付きリンヒ使用の8mm切開ECCEがスタンダードな術式と

なっている。

ところで、現地で2001年よりアイキャンプに参加して頂いている現地眼科医のミジャン先生について。

最初はまだ経験も浅く教える事も多かったが、2年程前から日本からの参加ドクターが教わる事も多くなっている程のECCEのスペシャリストに成長された。

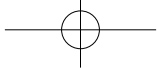
その理由はこうである。最近はお自分が勤務する病院主催のアイキャンプの主力メンバーとして頑張っており、アイキャンプで毎年2000眼～3000眼の白内障手術をこなしている。術日は、彼1人で1日に軽く40～50眼のECCE IOLを施行しているということだ。午前25例、午後25例である。上手くなるのも当然である。

このように、現地の心ある優秀な眼科医に経験を積んでもらえば、1人の眼科医が年間5千～1万眼の過熟白内障の手術を行うことは十分可能である。

結論

やる気のある現地ドクターにprechop ECCEの手技をマスターしてもらえば、精鋭サージャント10名なら年間10万眼、50名なら年間50万眼、100名の気鋭の眼科サージャントが育てば年間100万眼の4～6mm切開無縫合ECCE（しかも一切の白内障手術用マシーンを使わない）白内障手術が可能となる。





ALL THAT IS NOT SHARED IS LOST



久米さんを偲んで

POSA 副理事長 菊池眼科院長 井上 望



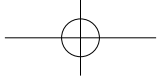
昨年5月30日にPOSA会員で倉富眼科看護師の久米さんが若くして他界されました。ボランティア精神を持たれ、バングラデシュでは子供達と優しく語らい、倉富先生の良きパートナーであり、またお目付け役でもありました。久米さんはマザーテレサを本当に尊敬されてましたよね。「私に子供ができたのは奇跡なんです。だから神様に感謝しています。」と言われた、あの明るい笑顔を思い出します。バングラデシュでは日本語が通じない現地のDrに「ミジャン先生、手袋何号ですか？」と物おじせずに堂々と日本語で聞かれてましたよね。それにしても永い闘病生活も大変だったと思います。本当に残念です。

久米さんはPOSAにとってはなくてはならない方でした。毎年のアイキャンプ資材準備はもちろん、バングラデシュでの手術介助や機材消毒、整理、更にアイキャンプや総会の日程調整、参加者の航空券やビザの手配、全て一人でされて大車輪の働きでしたよね。久米さんの葬儀が終わって「今年から久米さんがいないアイキャンプだ」と私たちは緊張感を感じていました。日程の関係上、先にバング

ラデシュに行く私がアイキャンプの物品準備をする事になりました。さて、何から取り掛かって良いものなのか？昨年までの消耗品の残りがバングラデシュにはそこそこ在るはずですが、手術を行うにあたって、バングラデシュに手術消耗品の何が残っているのかが解らない。つまり、「今回のアイキャンプで何が足りないのかが解らない」事が解りました。とりあえず、昨年のバングラデシュでのあいまいな記憶を頼りに、今回の手術症例分の不足していると思われる消耗品を準備するとしました。今回より次回以降の荷物重量を減らすため、軽量の物以外はディスポ製品を極力使わない様に準備しました。手術ガウンは何着要るか、点滴セットはどのサイズが必要か、注射針は何Gがどれだけ必要か、消毒液は、縫合糸は、手術後の点眼は、内服は、眼内レンズのパワーは……考えるだけで頭が痛くなります。

年末のアイキャンプが迫って来た、秋頃より自分の診療所職員の協力を得て準備開始しました。消耗品も一つ一つ、手術手順を想定して準備しました。手洗い器具から手術機材、手袋、ガウン、縫合糸等





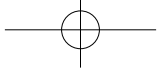
ALL THAT IS NOT SHARED IS LOST

を揃えました。そして手術用穴あきシートは通常業務の合間に3週間かかって当医院職員に20枚縫い上げてもらいました。それらの物品をパッキングして消毒、最後にスーツケースに詰め込み重量測定です。同行人数と空港で預け可能な重量を計算して「あっ、8kgオーバーだ」等と皆で話しながらの準備でした。職員も本当に良く協力してくれました。

実際に自分の日常診療を行いながらの機材準備はかなりの負担になりました。その上、前半組同行者の航空券も自分で手配したため出発が近くなる頃には多少の疲労を感じてきました。久米さんはこんな

大変な事をほとんど一人でなさってたのですね。今更ですが、今まで久米さん一人に仕事させて悪かったと思っています。これらの事が負担になって早く逝ってしまわれた訳ではないですよね。違いますよね。でも、ごめんなさい。今でも久米さんがいなくなってしまった、との実感はありません。どこかそのあたりに隠れてて我々の慣れない準備を覗かれてる気がします。物陰で笑ってないで……ほら、一緒に次回アイキャンプの準備を手伝ってくださいよ。こっちは大変なんですから、お願いしますよ。





ALL THAT IS NOT SHARED IS LOST



ひとりひとりにできること 神埼ライオンズクラブ前会長 東 キヨ子



私は、2006年7月から2007年6月まで神埼ライオンズクラブの会長を勤めさせて頂きました。一番印象的だったのは、なんと言っても視力ファーストIIでした。

昨年は第一副会長として、今年は会長として、勉強会にも参加しました。

参加を通して、失明の方が光を取り戻した喜びの報告を知りました。本当に嬉しい事です。本人はどんなに嬉しかったことでしょう。世界が変わったと思います。性格も明るくなった事でしょう。家族もどんなに喜んだ事でしょう。多くの方がもっと幸せになるべきだと強く思いました。また、発展途上国に出向き、奉仕で治療を下さる、倉富先生にも敬意を表します。

『3年間で会員平均405ドル～500ドル（日本円で46,980～58,000）』を集める事が我々ライオンズクラブの目標でした。その事により80人から100人の失明の方を救う事が出来ます。

労力奉仕は、その場ですぐに達成感・喜びを感じることが出来ます。でも、健康な方しか参加できず、時間・場所が限られます。

献金奉仕は、直接私たちには伝わりません。

でも、献金奉仕は、誰でも参加できます。老若男女・病気の人でも参加できます。

多くの方が献金をして頂くと大きな力となり、多くの方を救えます。

私達に出来ることを考えてみました。外食に行くのを1回節約してみてもどうでしょうか？ 洋服買うのを1枚減らしてみてもいかがでしょうか？ 私たちが我慢することで失明の方を救えます。

もっと大きな心を持って下さい。私達の節約が世界を明るく、幸せに出来るかも知れません。

これからも多くの方を救えるように、私達の献金でたくさんの方に協力して頂いて、大きな力になるように励みたいと思います。



ALL THAT IS NOT SHARED IS LOST



POSA アイキャンプに参加して

— 心エコーを背負って —



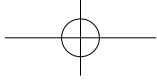
長崎大学大学院循環病態制御学講師 山近史郎

私は高校、大学の同級生でありボート部として同じ釜の飯を食って来た親友である眼科医・倉富彰秀君が主催するPOSAアイキャンプに昨年参加させていただきました。10数年来、倉富君がやってきた医療ボランティア活動にかねてから興味と羨望を抱きながらいつかは参加してみたいと思っておりました。今回満を持して断行し、私も循環器医として「開発途上国の方々の心機能評価」という自分なりのテーマを持って携帯型心エコーを背負って渡航しました。

バングラデッシュは世界でもっとも貧しい国のひとつであり、日本の5月位の陽気で昼にTシャツ夜はトレーナーで大変心地良い気候でした。ダッカ空港から目的地のコナバリ村まで車で1時間、人力車ならぬリキシャと車、バイクが混雑し信号もほとんど無く（あっても機能せず）騒然とした風景でした。沿道は戦後の闇市を想像させる店が連なり人も多くごった返していました。良く言えば、活気のある国民性でしょうか。

滞在地は「国際エンゼル協会」という日本のNGOが設立した孤児院や農業研修センターなどがある施設で住民向けの診療所もありました。なんとエコー室（腹部エコーのみ）があったのには驚き、その部屋を借りて日本より背負ってきた心エコーを白内障術前患者に35名ほど施行しました。手術室もあり、眼科的手術用具（顕微鏡やテレビカメラなど）は倉富君らがほとんど寄付しているようです。手術も受けられないような貧しい方々に光を与え術後3日目に退院ですが、皆笑顔で帰っていくのが印象的でした。滞在した孤児院には孤児だけでなく親が病気がちの貧しい家庭の子たちが預けられていますが、皆礼儀正しく笑顔で眼は輝いており天使のようでした。むしろ街を車で移動中に寄って来る物乞いの子供たちの方が教育もあまり受けられていないのではと感じ、孤児院の子たちはしっかり教育され恵まれているなと感じました。発展途上国の特徴なののでしょうか、貧富の差が激しく教育を中心とした政策がまだまだであろうと強く感じました。





ALL THAT IS NOT SHARED IS LOST

私が心エコー検査を施行する際、当初女性はイスラムという宗教上人前に肌をさらすのをひどく嫌っていましたが、後半は検診の意味もあり進んで参加してくれるようになりました。今回施行した35名の心エコー検査を簡単にまとめますと、以下のごとくでした。

心機能は多くは保たれていたが、心内腔は狭小傾向にあり循環血漿量が少ない印象であった。高血圧例を43%認めたが、多くは軽度の心筋肥厚であった。弁の加齢変化はあるものの動脈硬化性は少なく、重度の弁膜症は認められなかった。また心筋虚血は少ない印象であった。これらは生活習慣や食生活に関連しているのでしょう。

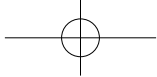
帰国の途、日本に降り立って高速バスで町を走るとき、きれいな空気、整然とした道路をみて日本は本当に恵まれているなと感じました。でも多くの方が携帯電話握ってうつむいているのを見て、バン格拉デッシュの子供たちが質素な服を着て笑顔で広場を駆け回って遊んでいる姿を思い出し、彼らの方が貧しくても心は豊かなのでは？とふと思ったりしました。

滞在した数日間は大変充実して、すごく長く感じました。倉富君のお母様はじめ御家族も一緒に現地の方やスタッフの方々とともに楽しく触れ合うことができました。医療人として地球人として貴重な経験をさせてもらったと、断行してよかったとつくづく思う次第です。本当にありがとうございました。感謝の気持ちで一杯です。

思い出されるのが、30年あまり前の大学入学式の日。私は倉富君と大学キャンパスを歩いていると、新聞部サークルの方からアンケートで声をかけられました。「尊敬する人はいますか？」という問いに、私はあまりじっくり考えたこともなかったので「父親ですかね。」と答えましたが、倉富君は間髪を入れず「シュバイツァーです。」と答えました。「またかつこつけちゃって！」と思わず言ってしまいましたが、彼はまさに今シュバイツァーのような活動をしており、暮れの忙しい時期に10年以上も絶やさず続けていることに対し、心から友人として、医療人として敬意を表する次第です。

スタッフの皆様の益々の御活躍祈念します。機会があればまた参加させていただきたいと思っています。





ALL THAT IS NOT SHARED IS LOST



POSA – For the people of Bangladesh
Eye Surgeon BNSB Eye Hospital
Dr. Md.Mizanur Rahman



In Bangladesh number of blind people are increasing day by day for cataract problems. Main cause of cataract is aged. Ultra violet-ray helps for cataract. So, people who stay in sunshine maximum time for cultivation or other works are attacked by cataract more than another people. Shortage of nutrition also cause of cataract. Except this, diabetic also causes of cataract.

Operation is only treatment for cataract. By operation extract problem lense then set artificial lense there and this is modern treatment for cataract. This kind of treatment is also expensive for local poor people in Bangladesh. Poor people can not easily go to hospitals. Head of POSA Dr. Mr. AKIHIDE KURATOMI of Japan made possible this treatment through International Angel Association by Eye Camp for Bangladesh people. By this Eye camp many people are benefited.

I am engaged with IAA about 7 years in this Camp and feel very much happy and thanks to POSA & Japanese people. My request to POSA to continue this program.

POSA – バングラデシュの人々のために

バングラデシュでは白内障によって光を失う人が日増しに増え続けています。白内障の主な原因は加齢です。また紫外線は白内障を促進します。なので、農業やその他の仕事で太陽の下にいる時間が長い人は、そうではない他の人々よりもより白内障になりやすいのです。栄養不足もまた、白内障の原因のひとつです。これ以外にも、糖尿病も白内障のひとつの原因となっています。

手術が白内障の唯一の治療法です。手術によって問題のあるレンズを取り出し、それから眼内レンズを入れるというのが、現代の白内障の治療法です。この治療法もまた、バングラデシュの地方の貧しい人々にとってはとても高価なものです。貧しい人々は病院に行くことも簡単にはできません。日本のPOSAの理事長である倉富彰秀医師が国際エンゼル協会を通じて行っているアイキャンプによって、バングラデシュの人々にも白内障の手術が可能になりました。このアイキャンプによって、多くの人々が救済されました。

私はIAAとともに約7年間このキャンプに携わってきましたが、とても幸福な気持ちと、POSAと日本の人々に対する感謝の気持ちでいっぱいです。これからも、ぜひPOSAにこのアイキャンプの活動を続けてほしいと思います。



ALL THAT IS NOT SHARED IS LOST



アイキャンプを通じて得たもの エンゼル協会 バングラデシュ コナバリ地区現地責任者 アジズル・バリ



1984年に国際エンゼル協会前代表の川村百合子さんが初めてバングラデシュを訪れたとき、行く先々で出会った子供たちの目がとてもきれいなことに驚き、このかわいい子供たちに是非教育を受ける機会を与えてあげたいと思われたそうです。それから月日が経ち、今では多くの方々から協力いただいて、子供たちのために学校の建設、奨学金供与、孤児院運営、医療活動など様々な支援を行えるまでに なりました。

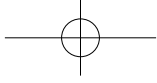
バングラデシュは、世界の中でも人口密度がとても高く、国民の55%が二十歳以下の若者や子供達で占められています。また農村に暮らす人々が人口の80%にも及び、乏しい食生活のために慢性的な栄養不足から、成長期にある子供たちに目の病気がとても多く見受けられます。そして成長するにつれて病状はますます進み、まったく見えなってしまうケースも珍しくはありません。もちろん町には設備の整った病院もありますが、農村部からわざわざ治療のために町に出かけていくだけの経済的なゆとりはなく、見捨てられてしまっているのが現状です。

今回ノーベル平和賞を受賞した世界的な経済学者のDr. ユヌス氏は目の治療専門の特別な病院を建てることを考えています。バングラデシュでは、現在約8万人が何らかの理由で目の手術を必要としています。その予備軍は、毎年12万人ずつ増えていると言われています。

私たちは、2000年にPOSAの理事長をされている倉富彰秀先生との出会いがあり、その年の暮れから私たちの運営するヘルスケアセンターで白内障の手術（アイキャンプ）が始まりました。これまで7回実施され、多くの人々が手術によって再び目に光を取り戻すことができました。また倉富先生とご縁によって、日本から多くの眼科医の方たちや医学生、看護師の皆さんがバングラデシュを訪れ、そのことがきっかけとなって、日本でもバングラデシュのことを皆さんにご紹介いただきました。

お互いを知ること、またお互いに協力し合うことで、誰もが願っている平和な世界の実現にまた一歩近づくことができた私は信じています。POSAの皆様の献身的なご協力に心から感謝いたします。





ALL THAT IS NOT SHARED IS LOST



A Noble Venture Past Council Chairman Lions Club International Md. Nurul Islam Mollah

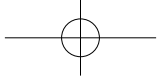


Bangladesh is a country of 140 million people who are struggling for their economic emancipation since the dawn of independence in 1971. Here we face the natural calamities and hazards every now and then. Hunger and poverty is a routine phenomena and our courageous population is facing this challenge with the help of International Community.

The Project Operation for Sight for All (POSA) is a project of Kanzaki, Japan is a remarkable name to remove the blindness and to show the path of light to a good number of people of this country. Mr. Azizul Bari, the Executive Director of International Angel Association a voluntary Organization of Japan, is the bridge between the ill fated blind people of the country and POSA. It will not be out of place to mention the name of the noble soul Mrs. Yuriko Kawamura of Itami, Japan who took the initiative to form this Association. Her dream is going to be implemented, thousands of have nots are getting benefit through the Association.

It is my good luck that while I was Council Chairman of Lions Club International, Multiple Districts-315 Bangladesh, the Executive Director of the Association introduced me with Dr. Akihide Kuratomi, the Eye surgeon and a member of Lions Club of Kanzaki, Japan. Mr. Kuratomi asked me to render the support of local Lions Club in this organizing eye camp and to operate the cataract patient. Though before our introduction POSA was organizing such eye camp annually where a good number doctor, paramedics and Nurses of this team member was rendering tremendous service to the patients in camps at Konabari premises of the Association.





ALL THAT IS NOT SHARED IS LOST

We are grateful to the Association and its Executives and especially to Dr. Akihide Kuratomi and his team member for visiting Bangladesh every year and doing such a noble deeds of operating eye patients at the cost of POSA in association within Angel Association.

Before I conclude my note on noble Venture of POSA. I express my sincere willingness to support the causes of the organization along with the honorable member of Lions Clubs of Kanzaki in any future venture to mitigate the sufferings of people of own country. I once again convey my thanks and gratitude to the students and staffs of Angel Association at Konabari who during our all visit to the premises have made remarkable with their hospitality.

Let this noble venture of POSA in association with the support of Lions Club of Kanzaki, Japan and Barnali, Bangladesh, be continued in coming year to help restoring the vision those who have lost and may God keep the organizers in good speed.

崇高なる事業

バングラデシュは人口1億4千万人の国で、彼らは1971年の国家独立からずっと、経済的に解放されようともがき続けてきました。ここでは、私たちはときに自然災害や危険に直面します。飢えや貧困は日常茶飯事で、私たちの勇敢な国民は国際社会の助けを受けながらこの問題に立ち向かっています。

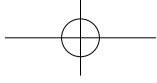
The Project Operation for Sight for All (POSA) とは、日本の神埼市に本拠地を置く事業で、その名前にはこの国の多くの人々の目に光を取り戻そうというすばらしい意味があります。日本のボランティア団体である国際エンゼル協会の（現地責任者）であるアジズル・バリ氏がバングラデシュの不幸な盲目の人々と POSA の架け橋になってくれました。またこの場において、気高い精神をお持ちになり、国際エンゼル協会の設立を提唱した、日本の伊丹に住むカワムラユリコ氏について触れておきます。何も持たない数千人の人々が、この協会を通じて恩恵を受取るという彼女の夢は、今まさに実現しようとしています。

私が多くの地域（315の地域）からなるバングラデシュの国際ライオンズクラブの協議会議長であったとき、国際エンゼル協会の現地代表が日本の神埼ライオンズクラブのメンバーであり、眼科医である倉富彰秀医師を紹介してくださったことは、私にとってとても幸運なことでした。倉富氏は私に、このアイキャンプでの白内障の患者の手術のために、地元のライオンズクラブに援助を行ってほしいと言われました。けれども、私たちの紹介の前に、POSAはこのチームのメンバーである多くの医師や医療スタッフや看護師で年に一回そのようなアイキャンプを組織し、コナバリのエンゼル協会の建物で行なわれたアイキャンプにおいて多くの患者に対してたいへんな奉仕を行っていらっしゃいました。

私たちは、協会やその現地の方々、特に毎年バングラデシュを訪れてはエンゼル協会の中の協会を通じて POSA の負担で白内障患者の手術を行うという、そんな気高い行いをしていらっしゃる倉富彰秀医師と彼のチームメンバーの方々に大変感謝しています。

POSAの気高い行いについての私の文章を終える前に、わが国の人々の苦痛を和らげる活動において、神埼ライオンズクラブの名誉ある会員の方々とともに協会の理想を援助してくださったことへの私の心からの感謝の気持ちを表したいと思います。また、エンゼル協会の建物での滞在を、親切なおもてなしによってすばらしいものにしてくれたコナバリのエンゼル協会のスタッフや生徒たちに、もう一度心から感謝を伝えたいと思います。

願わくば、日本の神埼ライオンズクラブとバングラデシュの Barnali ライオンズクラブの援助を受けて行なわれている POSA の崇高な事業が、光を失った人々の目に再び光を取り戻すために今後も続いていきますように。



ALL THAT IS NOT SHARED IS LOST



再び目に輝きを取り戻して NPO 法人 国際エンゼル協会理事 浅野 博之



本協会の現地プロジェクトには、孤児救済のための児童養護施設をはじめ、職業訓練所、農業研修センター、女性自立センター、YURIKOエンゼルスクールに加えて、地域医療の向上を目的とした診療施設・ヘルスケアセンターの運営があります。同診療施設は、年間3万人を超える地元住民に心のこもった医療サービスを提供し、多くの人々から確かな信頼を得ています。

2000年より、この施設を利用いただいて POSA・JAPANの皆様による白内障手術・アイキャンプが毎年行われてきました。インドでの6年を加えると昨年暮れで13回を数える年末恒例の行事となっているようですが、倉富理事長をはじめ、多忙な皆様が1年がかりで準備をされ、しかも最も忙しい年末に仕事や家庭サービスを犠牲にされて発展途上の貧しい人々のために今日まで献身的に継続していらっしゃることに、頭の下がる思いがいたします。

私も当協会の海外事業担当者として、POSAの皆様によるアイキャンプに当初から関わらせていた

だきました。手術を終え、目に輝きを取り戻して喜び勇んで帰途に着く現地の人々を見送る度に私は、「この人たちは再び目が見えるようになったことで、また人生においても新たな希望の光を見出すことができるかも知れない」、そう思うと別れ際にお礼の握手を求めてくる一人ひとりの手を、励ましの気持ちから思わず力を込めて握り返している自分に気づかされます。そして、「POSAの皆さんは、本当にいい仕事をされているなあ」と、心の中で叫んでいる自分がそこにありました。

このアイキャンプに毎回、現地のスタッフやエンゼルホームの子供たちが休日を返上して、精力的に入院患者さんの身の回りのお世話や手術の介添えに取り組んでいる姿を目にすることも嬉しい限りです。

最後になりましたが、この度POSAの関係有志の方々から、バングラデシュのカパシア・ホリモンジョリ・パイロットハイスクール新校舎建設のための支援をいただきましたこと、ここに改めまして御礼申し上げます。



ALL THAT IS NOT SHARED IS LOST



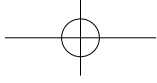
アイキャンプの思い出 菊池眼科看護師 佐伯 陽子



人生41年目にして初の海外が今回のバングラディッシュでした。私以上にボランティアに興味のある主人も行きたがっていましたが、仕事の都合上どうしても無理だったため、断念しました。「初めての海外は一緒に行きたかったんだけど……」と言う言葉にやや心は揺れましたが、私の中ではもうバングラディッシュ行きを決めていました。子育てや家事に追われていた自分を、日本から出て見つめ直すいいチャンスではないか、未だかつて経験したことのないことができるいい機会ではという思いが強かったのです。あくまでも旅行ではない目的があったため飛行機の乗り換え等も自分の中では意外と冷静なかんじでしたが、関西空港からタイ航空の便に乗るとき、客室乗務員の方が外国の方だったので、その時はさすがに海外に行くんだと実感した瞬間でした。それから先は目に入るすべてのことが、驚きや感動の連続と言っても過言ではないほどのものばかりでした。ダッカ空港についたとき、国の貧困の程度が何となく感じられ、空港の外に出ようとしたら黒山の人集り。柵の間から手を出して何か一生懸命こちらに語りかけていて、なぜ昼間に小さい子供や

若者や働き盛りのような人々がこんなところにいるのかと、やや退きそうになるほどのショッキングな光景でした。それからお迎えの車に乗り道路に出たら、車の量は多く、信号や車線もなく我先とばかりにスピードは出すは、クラクションはしょっちゅうならしてるは、もう遊園地のアトラクションより生命の危機を感じるほどスリリングな車中でした。車窓から見る光景もまるでタイムスリップしたのではと思うほど、テレビや写真でしかみたことのない日本の戦前のようなかんじでした。土埃がひどく家はバラックが多く、子供から若者、そして老人までほとんどのひとたちが、商売や畑仕事など何らかの労働をしていて、今の日本では絶対に考えられない光景でした。でも、エンゼル協会の敷地内に入っていくと子供たちが南国のきれいな花束を持って出迎えてくれ、「こんにちは」と日本語でむかえてくれたときは安心感と感動が入れ混じったようなきもちでした。他にも複数の上手な日本語で私たちに近づいてきてくれ、そのきらきらした瞳の純粋さが親近感さえも与えてくれました。孤児という複雑な生い立ちを持った子供たちなのに、とても素直で明るく、



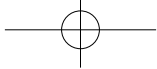


ALL THAT IS NOT SHARED IS LOST

その元気な姿に励まされ、ここで自分にできることをがんばらねば、という気持ちを強くしてくれ、それまでの疲れも吹き飛んでいきました。それからすぐに手術室の物品チェックと掃除をしたのですが、密室のはずなのにどこを拭いても触っても黒くよごれており、土埃が部屋まで入って来るんだなあと、これまた驚きでしたが、なんとか次の日から手術ができるように現地の看護師さんたちといっしょに準備ができました。それからしばらくして食事。バングラデシュならではのカレーでしたが、とてもおいしいものでした。デザートまで手作りで最後にミルクティー。それから内容は変わるものの毎食毎日カレー三昧でした。さすがに手で食べることをまねすることはできませんでしたが、とてもおいしいものばかりでした。それから、夜はエンゼル協会の方や他のスタッフの方々とゆっくりお話しして、バングラデシュのことやいろんなことを知ることができ、いつのまにか親しみができてきて、楽しい夜の語らいができるようにさえなりました。エンゼル協会の

方はもちろんのこと、ここに来る方は人が好きで優しい方ばかりなんだろうなと、つくづく感じました。おかげで私も本当に楽しく過ごすことができました。あつという間の三日間でしたが、ボランティアをするというよりも、私にとってはたくさんのことを与えて頂いた三日間でした。今度また行くことができたなら、もう少し子供たちとふれあって思い出を作れたらなと思いました。今回の体験で本当の意味での人の優しさや子供の本来のあるべく姿を自分なりにあらためて知ることができ、このことをこれからの自分や子育てに役立てていけたらと思っています。今回御一緒させて頂いた倉富先生の奥様をはじめ他のスタッフの方々、エンゼル協会のスタッフの方々、本当にお世話になりありがとうございました。また、お会いできる日を楽しみにしています。それから最後になりましたが、今回連れて行ってくださった菊池眼科の井上先生、本当に感謝しています。ありがとうございました。





ALL THAT IS NOT SHARED IS LOST



2回目のアイキャンプ 熊本県立保健学院 羽生 友美



4月から社会人として働く私にとって、今年が学生として参加できる最後のチャンスであり、どうしても参加したいと思い家族や学校の友達が協力してくれたことでどうにか参加することができました。

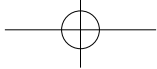
空港を出るとフェンス越しにたくさんの人が集っており、2年前と変わらない景色にまたバングラに來れたことをとても嬉しく思いました。今回は2回目の参加であり、エンジェルハウスの子ども達やスタッフの方にまた会えることも楽しみでした。

白内障の手術では、手術室の準備から片付けまでを院長先生の奥さんが一つずつ丁寧に教えてくださり、手術に携わることができました。準備や片付け一つにしても、実施する人や今後使用する人のためにまた、いかにすれば効率的な手術になるのかを自分の頭で考え、行うことが大切だということを学ぶことができました。手術は順調に終わり患者さんは、笑顔に満ち溢れ、言葉はわからないものの何度も手を握って下さりその手のぬくもりからも感謝の気持ちと目に光が戻ることの喜びが伝わってき、手術に携わることができたことに嬉しく思いました。

また、手術には様々な方が携わっていますが、その中でも手術のみならず病室で進んで手伝いをしているエンジェルハウスの子ども達にはとても感心させられました。子ども達は様々な事情によりこのハウスに預けられていますが、とても明るく人懐っこく、すてきな笑顔と温かい心をもっている子ども達でいっぱいでした。元気を与えるというよりもたくさんの元気をもらいました。今回のアイキャンプでもバングラの生活に触れ多くのことを学び得ることができたと思います。

倉富院長先生、ご家族をはじめアイキャンパススタッフの方々には、様々なご迷惑をかけたかと思いますが、本当に参加してよかったです。また、「たらこ」のダンスと一緒に踊った、あんりちゃん、ななちゃん、ひろなちゃんすごく楽しかったです。一生忘れる事はないと思います。この参加に快く送り出してくれた、両親と家族に心から感謝します。ありがとうございました。また、アイキャンプに参加したいです。





ALL THAT IS NOT SHARED IS LOST



アイキャンプと子供たちの笑顔 佐賀大学医学部2年 戸次 宣史



私は前からボランティアというものに大変興味がありません。そして大学に受かった昨年、ちょうどある知り合いからこのPOSAのことを聞き、すぐに行くことを決意しました。

そして、待ちに待った12月22日。出発前は、バングラデシュという国がどういう国か、現地の人々とどのように触れ合ったらよいか、自分に何ができるだろうか、というような好奇心や不安が胸の中で交錯していました。

12/23昼すぎ、ダッカ空港着。空港にはライフルのような銃を持った警官がウロウロしており、一歩空港の外に出ると、その独特な雰囲気圧に圧倒されそうでした。

それからエンゼル協会まで車にて移動。ボロボロのバスの窓ガラスに大きなヒビが入っていたり、バスの上に大勢の人が乗っていたり、道の両脇にはたくさんのリキシャが待機していたり、全ての光景が日本との違いを物語っていました。何より、停車した車に貧しい人々が群がってきて物乞いする光景にはとても衝撃を受けました。

1時間後、エンゼル協会到着。エンゼル協会の子供たちに歓迎される。子供たちの笑顔を見ると、それまで抱いていたバングラデシュという国に対する不安が一気に抜ける感じがしました。

その後、入院している患者さんの病棟に行ったり、子供たちの寮を見学に行ったりしていると、この活動の重みのようなものを改めて感じました。

そして、それからの5日間はあっという間でし。全てのことが初めての経験であり、自分にでき

ることを模索しているうちに終わってしまったといった感じです。しかし、この5日間で私は多くのことを学べました。

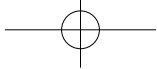
子供たちは親が事故で亡くなったり、経済的な事情から親に手放されたりと、とても可哀想な境遇にもかかわらず、人間的にしっかりしており、病院の患者さんの介護のお世話をしたり、日本の同年代の子供たちよりはるかにしっかりしていました。また、奨学金をもらわなければならないため、必死に勉強していました。彼らの側で生活していると、多くの点でついつい我を振り返ってしまいました。明るく前向きに生活している彼らと一緒にいると、自然とこっちまで笑顔になっていました。

それから、毎日朝・昼・晩に食べたカレーは最高でした。チキンカレー・ビーフカレー・ビーンカレー・シーフードカレーなど、毎回具材が変わり、とても美味しかったです。そして、現地の人は右手でカレーを食べていましたが、見ていて見事でした。真似して食べてみましたが、なかなか上手く食べられませんでした。私は、たった5日間の滞在で、バングラデシュという国が大好きになりました。

ある患者さんがおっしゃっていた言葉、「日本の医師はとても頼りにしており、尊敬している」。この言葉を忘れずに、これからも頑張っていきたいと思います。

最後に、このような貴重な機会を与えていただいた倉富先生、現地でさまざまなお世話をしていただいた田邊先生・堀先生、その他POSA関係者の方々、本当にありがとうございました。





ALL THAT IS NOT SHARED IS LOST



POSA アイキャンプに参加して 長崎県立島原高校 3年 伊崎 祐之



私にとって今回のアイキャンプはとても貴重な体験になりました。私は今回のアイキャンプでは一人高校生として参加したわけですが、初めてのバン格拉デシュ行きで、具体的に何をすればいいのかもわからないまま出発を迎えたので、不安と緊張でいっぱいでした。しかし、現地に向かう間や着いてからも井上先生をはじめ、スタッフの方々にも優しくしていただき、緊張はすこしずつほぐれていきました。そして、何よりも空港から出た瞬間に広がる見たことのない景色に目をうばわれ、不安や緊張を忘れ、期待で胸がいっぱいになりました。日本では見たことのない景色を、体全体で感じることができました。

そして、エンジェルホームに着くとそこの子供達にとってもすごい歓迎をうけました。それが一番始めだったので衝撃を受けたからかもしれませんが、あの感動は日本に帰ってからも忘れられません。

まだ専門の知識を全く知らないの、手術のお手伝いのときはとても緊張しました。道具の一つ一つも初めて見るような物ばかりで、何に使う物かわからないので不安でした。しかし、スタッフの方々に色々丁寧に教えてもらい、少しずつわかるようになってきました。自分からも動けるようになり、積極的にがんばりました。レフラクトメーターを使う機会もあり、慣れない手つきながら精一杯頑張りました。

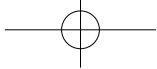
患者さんたちとは言葉も通じないので苦勞もたくさんしましたが、患者さんの不安そうな顔と現地の子供たちが頑張ってくれているのを見て、「頑張らないと！」という気持ちになりました。患者さんに対しても習ったばかりのちょっとした現地の言葉を使って不安を和らげてあげようとも頑張りました。

そして、みなさんのおかげで手術の手伝いも無事終わることができました。今回私が一番心に残っていることは、患者さんの最初の不安そうな顔が手術が終わった後とても明るく変わっていたことです。間接的にであれ、自分が関わった手術で患者さんがそんな風変わってくれることはとても嬉しいことでした。

何事も初めてのことで、最初は緊張の連続でしたから、仕事の終わったあとの充実感は、なんともいえないぐらいの感動でした。この感動はとても日本での高校の生活の中では経験できないものでした。このアイキャンプのことは一生忘れないと思います。

最後に誘ってくださった井上先生を始め、一緒に参加した皆さん、エンジェルホームの皆さん、本当にありがとうございました。またいつか、参加したいと思います。





ALL THAT IS NOT SHARED IS LOST



アイ・キャンプを体験して くらとみ眼科医院スタッフ 楠元 國公



ボランティア活動に初めて参加したのが3年前でした。視覚障害者の山の会で障害者をサポートしながら登山するものでした。今回は海外での活動で貧しい社会の中で白内障を患った患者さんに眼内レンズを挿入する手術のボランティアである。手術や治療は一切出来ないが手術の準備、電気配線やモニターの設定、患者さんの誘導を手伝えると思い参加することに致しました。

バングラデシュ人民共和国は1971年パキスタンから独立、人口は約1億4,000万人、言語はベンガル語、国民の85%がイスラム教、気候は熱帯地域にあり、11月～2月が冬の乾期、3月～6月が夏期、7月～10月が雨期だそうです。雨期にはサイクロンが発生し、いたる地域で洪水が起こること、ボランティア活動は乾期の時期に行われます。

私は関西国際空港からバンコクを経由、乗り継ぎ時間を加えて12～13時間の長旅となりました。やっとダッカ空港に着くと人の多い事に驚きました、迎えや見送りの人々で人の山……出口まで長蛇の列、係の人に聞くと出稼ぎの人が里帰りする時期で大きな荷物が毛布にくるまれ、四角に縛ってある移動が大変そうに見えるがそれほど苦にしていな様子である。

騒がしい空港を後にガジプール県コナハリ村のエンゼル協会を目指して車で移動しました。現地の乗り物は力車（自転車改造した乗物）が多くタクシーとして利用している、砂ぼこりのするスラム街

を通ると子供達が素足で水遊びしている。1時間程でエンゼルホームに到着。孤児院の子供たちと職員の方々が花束と拍手で迎えてくれました。

感謝 感激の連続でした。

ゲストハウスで休憩のあと明日からの準備に取りかかりました。私は日本から持ってきたマイクロカメラを顕微鏡に取り付け、手術風景を待合室でも見られるようにセッティングしました。私の技術では良く写らず試行錯誤の連続でした。翌日2カ所で手術が手際よく実施されました。患者のほとんどが高齢者で足取りがおぼつかなく孤児院の子供達が支えて誘導してくれる、お年寄りに寄り添い会話しながら歩く姿が自然で最近の日本に見られない光景でした。今回は初めてのケースで山近先生の心臓検診がありました。1階に診察室を作りエコーを使いながら診察されました。そこでは身長、体重測定を手伝いました。山近先生のひとりごと一般的に心臓の大きさが小さいな……とつぶやかれた。栄養士の私は栄養学的にどうなのか？考えてしまいました。5日間で75眼に白内障の手術が行われました。

退院時の患者さんは足取りも軽く、動きも良く、「あなたにも神の恵みがありますように」と握手された時は少しでもお役に立てて良かったな……と涙が出ました。

最後になりましたがボランティアに参加された先生方と支援スタッフのみなさんご苦労さまでした。有り難うございました。



ALL THAT IS NOT SHARED IS LOST



平成 18 年度事業報告書



＜バングラデシュ眼科診察

及びスクリーニングアイキャンプの実施＞

実施期間：平成18年4月1日から平成19年3月31日まで

実施場所：バングラデシュ国インターナショナル
エンゼルアソシエーション（IAA）本部
クリニック施設にて

派遣員：現地眼科医及び現地助手

＜バングラデシュアイキャンプの実施

及びビタミン配布＞

派遣期間：平成18年12月20日から平成19年12月28日まで

実施期間：平成18年12月21日から平成18年12月26日まで

実施場所：バングラデシュ国インターナショナル
エンゼルアソシエーション（IAA）本部
クリニック施設にて

派遣員：

眼科医5名	倉富 彰秀	井上 望
	田邊 樹朗	堀 秀行
	山近 史郎	
看護師2名	佐伯 陽子	倉富亜由美

医学生

戸次 宣史

看護学生1名

羽生 友美

一般参加1名

伊崎 祐之

スタッフ

楠元 國公

対象患者数：75名

活動内容

今回バングラデシュアイキャンプも7回目となりました。現地の眼科疾患の症例調査及び970名の患者さんを対象としたスクリーニングアイキャンプ及び75名の白内障手術を実施し、近くの小学校にビタミンAの配布も行った。

国内啓発活動

バングラデシュアイキャンプへの寄贈品、募金、参加の呼びかけ

バングラデシュの現状についての啓発活動

平成18年度事業報告書

平成 19 年度事業計画書

＜バングラデシュ眼科診察

及びスクリーニングアイキャンプの実施＞

実施期間：平成19年4月1日から平成20年3月31日まで

実施場所：バングラデシュ国インターナショナル
エンゼルアソシエーション（IAA）本部
クリニック施設にて

派遣員：現地眼科医及び現地助手

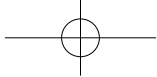
＜バングラデシュアイキャンプの実施

及びビタミン配布＞

派遣期間：平成19年12月23日から平成19年12月31日まで

実施期間：平成19年12月24日から平成19年12月29日まで

実施場所：バングラデシュ国インターナショナル
エンゼルアソシエーション（IAA）本部
クリニック施設にて



ALL THAT IS NOT SHARED IS LOST



温かいご支援ありがとうございました。

平成18年4月～平成19年3月
敬称は省略させていただきます。(順不同)

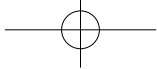


寄 付 者

ブリストルマイヤーズ社 (荒木勝子)	高塚久嘉	高山マチ子
日本アルコン	日本点眼薬研究所	千寿製薬
日東メディック	古賀医療器	芥川 泰生
東 キヨ子	五十嵐 裕司	神埼ライオンズ
菊池眼科医院患者	小森 啓範	田中 博都
牟田 環	(有)毛利工務店	森岡千鶴子
くらとみ眼科患者様一同	(有)百田種苗農材	

物 品 寄 付 者

川本産業(株)	滅菌商影XW …………… 1800枚 (X線造影剤入りガーゼ)
参天製薬(株)	クラビット点眼薬5ml …………… 100本 サンベタゾン液5ml …………… 100本 タリビット点眼薬5ml …………… 10本 タリビット眼軟膏3.5g …………… 50本 ベノキシール点眼液20ml………… 10本 ミドリンP点眼液10ml………… 10本 オペガンハイ0.85ml………… 50本
フェザー安全剃刀(株)	マイクロフェザー P-715 …………… 50本
HOYA	IOL YA-60BB …………… 50枚 IOL VA-60BB …………… 50枚
菊池眼科 井上Dr.	千寿製薬 オペガードネオキット500ml ……5×8本 生理食塩液1000ml …………… 10本 70%イソプロパノール「アトル」500ml …… 10本



ALL THAT IS NOT SHARED IS LOST



POSA理事・監事名簿



理事長	倉 富 彰 秀	(医療法人 輝秀会 理事長)
副理事長	井 上 望	(菊池眼科 理事長)
	今 永 至 親	(今永眼科 院長)
理 事	樋 本 純 一	(ならもと内科医院 院長)
	野 口 守	(萬永堂 代表)
	林 敢 為	(介護老人施設グリーンヒル幸寿園 施設長)
	橘 光 幸	(古物商 橘商事)
監 事	末 永 博 義	(末永司法書士事務所 代表)
	田 中 雅 美	(田中雅美税理士事務所 代表)
	松 本 政 則	(佐銀信用保障株式会社)

(敬称略・五十音順)

POSA名誉会員

名誉会員	古 川 康	(佐賀県知事)
	中 尾 清 一 郎	(佐賀新聞社長)

(敬称略・五十音順)

POSA一般会員

東 キヨ子	世 戸 憲 男	樋 口 英 明	毛 利 正 直
原 康 夫	木 原 豊	境 和 臣	山 近 史 郎
吉 武 繁 利	鶴 田 遊 山	伊 崎 祐 介	(株)アステム
宇 野 光 次	田 中 博 都	楠 本 國 公	(株)メニコン
江 口 アキラ	松 本 博	小 柳 博 那	(株)日本点眼
松 尾 隼 雄	阪 谷 洋 士	佐 伯 陽 子	(株)参 天
八 谷 臨	於 保 寛 美	田 邊 樹 郎	(株)千 寿
中 村 イク子	大 島 博	戸 次 宣 史	(株)ア ト ル
古 賀 千 春	出 崎 蓉 子	羽 生 友 美	(株)科 研 製 薬
山 崎 清 二	財 部 貴 資 男	堀 秀 行	

POSA(ポサ) 規約 (一部抜粋)

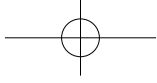
(目的)

第3条 本会は、眼科衛生学に関する知識の普及及び白内障・緑内障に対する研究・ボランティア活動を行い、視覚障害者の減少に寄与することを目的とする。

(入会金及び会費)

第7条 正会員は、入会金壹万円、及び年会費壹万円を納入しなければならない。

POSA一般会員入会は随時受け付けております。ご連絡下さい。(POSA事務局)



ALL THAT IS NOT SHARED IS LOST



現地エンゼル協会が今年竣工した YURIKO エンゼルスクール

Project Operation Sight for All

POSA 事務局

〒842-0002 佐賀県神埼市神埼町田道ケ里 2435-1

医療法人 輝秀会 くらとみ眼科医院

TEL : 0952-52-8841 FAX:0952-52-8765

ホームページアドレス <http://www2.saganet.ne.jp/posa/>

E-mail アドレス posa@po.saganet.ne.jp

2007年11月発行